



1 アニマリス・サブルーサ・キューティス Animaris Sabulosa Cutis

カリダム期(1993~1994年)のビーストの化石。この時期にビーストたちは風で動くという進化をとげた。サブルーサ・キューティスとはラテン語で「砂の皮膚」という意味。粘着テープでできた羽の裏側に砂が付着し、カモフラージュのように見えたことから命名された。脚部には変速装置を備え、体の向きを変える機能や水を感知するセンサーを持っていたが、実際にはほとんど機能せず、そのアイデアは後の世代のビーストによって実現された。



2 アニマリス・オルディス Animaris Ordis

ビーストの脚の動きが最もよくわかるのが、オルディス。脚を構成しているプラスチックチューブの「長さの組み合わせ」であるホーリー・ナンバーによってつくられた12本の脚を順番に繰り出して歩くさまがよくわかる。元々自動車メーカーBMWのCMのために生まれたビースト。シンプルで小型なので会場では来場者が自分の手で押して動かすことができ、ビーストとの一体感を得ることができる。



3 アニマリス・グベルナーレ(展示は頭部分のみ) Animaris Gubernare

グベルナーレは風と歩行システムの両方を「統治する」の意味。風が吹くと、吹いてきた向きに自らの正面をすえ、進行方法を変えるのが特徴。アニマリス・シアメシスのDNAを受け継ぐ双胴体ストランドビースト。展示の大きな樽は先頭部にあり、移動時の重量の負担を軽減するためにローリングする機能を持っていた。



4 アニマリス・リジデ・プロペランス Animaris Rigide Properans

「熱が和らぐ」を意味するタピディウム期をヤンセンは「生殖の時代」と位置づけている。この時代と同じ遺伝子を持つ個体の複製が可能となったため、プラスチックチューブからできた同じパーツ(遺伝子)を使って、同様の生物を次々と誕生させることができるようになった。プロペランスはプロペラを備え、風を受ける方向に対して、高速で横歩きをすることができた。



5 アニマリス・ユメラス・セグンダス ★ Animaris Umerus Segundus

上部にある羽が風を受けると、背骨のように全身をつらぬいているクランクシャフトが回転し、その風をベクトルに貯めていく。ビーストの「筋肉」にあたるこのしくみは、脚がある姿勢をとるとエネルギーを解放することで動き出し、歩行を開始する。ユメラスとはラテン語で「肩」を意味する。脚を動かす筋肉は、まさに肩にあたる部分にある。また、脚の間にあるスキーのスティックのようなもので地面を押し、歩行速度を速めたり進行方向を変えられるしくみも持っている。



6 アニマリス・ペルシピエーレ・レクタス ★ Animaris Percipiere Rectus

「脳」を意味するセレブラム期に数々生まれたペルシピエーレ族のひとつ。ピストンとバルブを持つ太さの違う2本のチューブに空気が送られるとバルブ開閉情報が信号となり、ある動きをとる。これはビーストにとっての神経細胞であり、その組み合わせが「脳」というわけだ。レクタスは強い風を感知すると、神経細胞によってハンマーが砂地に杭を打ち込み、吹き飛ばされないように自らを固定することができる。



7 アニマリス・プロボスキス ★ Animaris Proboscis

2体で一組のプロボスキスはなんとも不思議な動きを見せてくれる。プロボスキスとはラテン語で「鼻」を意味する。鼻面を突き合わせるようにして向き合う2体は、気持ちを通わせているかのように「鼻」を上下左右に動かす。ヤンセンが求愛行動とも呼ぶこれらの動きは、将来的にビースト同士のコミュニケーションへと進化する可能性を持っている。



テオ・ヤンセン Theo Jansen

1948年オランダ・スフェニンゲンに生まれる。デルフト工科大学で物理学を専攻後、1975年に画家に転向。1990年キネティックアート「ストランドビースト」の制作を開始。アートと科学が融合したさまざまな作品を制作し、注目を集める。現代のレオナルド・ダ・ヴィンチと称されるアーティスト。



8 アニマリス・アポディアキュラ Animaris Apodiacula

ストランドビーストにとって、風は移動のための原動力だが、「強すぎる風」は自らが転倒してしまう危険がある。アポディアキュラは強風による転倒を防止できるアウトリガー(突き梁)を備えている。そのため、背の高い形状ながら、安定して歩くことができた。現在は「化石」となってしまったが、アウトリガーの器官はその後のビーストに引き継がれることとなった。



9 アニマリス・トゥルゼンティア・ヴェーラ Animaris Turgentia Vela

微風を意味するアウルム期に生まれたビーストは、弱い風でも歩けるような機能を持っている。トゥルゼンティア・ヴェーラはふくらんだ帆という意味のその名の通り、3枚の大きな帆で風を受け止める。帆は大きさを調整することができ、風の強さに合わせて歩行速度を変化させることもできる。弱い風に対応すると、強い風では転倒しやすくなるため、転倒防止の補助ユニットをつけた形に変身することもできる。



10 アニマリス・ブルハス・プリムス Animaris Burchus Primus

ブルハスはラテン語で毛虫や芋虫を意味しており、横から見ると正弦波のように並んでいるいくつもの同じ形の脚が順番に動き、全身を波打たせながら進んでいく。ブルハム期の最初のビースト。これまでのホーリー・ナンバーによる脚の構造を持たず、突然変異のように生まれたブルハム期のビーストだが、10年以上も前のヴァポラム期(2001~2006年)にいたルゴサスなどキャタピラ型の進化形とも考えられる。



11 アニマリス・ブルハス・セグンダス Animaris Burchus Segundus

アニマリス・ブルハス・プリムスの進化形で、大きさも2倍以上となる。推進のメカニズムはユメラスやモデュラリウスのようにスキースティックを押し出して前進する発想から。プリムスは四角形の連なりを節としてうねったが、セグンダスは左右からひし形にはさまれた六面体を構成するようなパーツが次々と連なっているが、横から見ると正弦波を描くところは同じである。自然の風で動ける形へ、進化の過程にある。



12 アニマリス・シアメシス ★ Animaris Siamesis

「自己破壊」を意味するスイシディウム期を代表するビースト。シアメシスは2頭のビーストを並べて接合した構造をもつ。それぞれの羽を共通のクランク軸でつなげて重量を抑えた。歩行ユニットは、糸、竹の棒、テープ、ゴムなどをいっさい使わない100%プラスチック製。総重量は200kg、脚の数は72脚におよぶ。センサーとしてはたらくウレタンチューブが砂の上を這い、水を吸うと神経細胞のバルブが閉じて、水から遠ざかる動きをする。過去最大級の双胴体ストランドビースト。



13 アニマリス・ブルハス・ウミナミ ★ Animaris Burchus Uminami

2017年三重県立美術館の展示会で初めてお披露目された。名前の「ウミナミ」は会期中の公募により採用された4才の男の子のアイデア。ブルハス族の中では小型で、ブルハス・プリムスの軽快さとブルハス・セグンダスの構造を併せ持っている。人が引っ張って歩かせることができ、ウミナミの命名どおり、体を海の波のようになめらかに動かしながら移動する。



◆リ・アニメーション(ストランドビーストが動きます)実施時間

◎4/28(土)~5/2(水)

11:00 / 13:00 / 15:00 / 16:00

時間や日によって実施場所が変わります。当日の館内掲示をご確認ください。

◎5/3(木)祝~5/6(日)

おまつり広場 10:00 / 12:00 / 14:00 / 16:00

(6)アニマリス・ユメラス・セグンダス (7)アニマリス・プロボスキス

マリンシアター 11:00 / 13:00 / 15:00 / 18:00

(13)アニマリス・ブルハス・ウミナミ

※実施時間外は、テオ・ヤンセン展DVDの上映を行います。(9:00~閉館の1時間前まで)

◆小型のストランドビースト操作体験 (2)アニマリス・オルディス

◎4/28(土)~5/2(水)

実施場所:本館入口

9:30~10:30 / 11:30~12:30 / 13:30~14:30

◎5/3(木)祝~5/6(日)

実施場所:おまつり広場

時間については当日の館内掲示をご確認ください。